

論文

# 史料『鴻跡帖』の一考察

孫 倩\*

## はじめに

日清戦争後、清国政府は本格的に留学生を日本に派遣し始めた。このような歴史的背景の下に、各教育機関は積極的に清国人留学生を受け入れる姿勢を取っていた。明治39年（1906年）<sup>(1)</sup>の時点で、東京の私立学校が受け入れた清国人留学生は総人数6,994名であり、日本国立・公立大学及び各高等専門学校の受け入れた人数は309名であった。その中で、早稲田大学は、清国人留学生983名（東京私立各学校の学生数順では3位）を受け入れていた。<sup>(2)</sup>この早稲田大学に学んだ留学生たちの様子を窺うためには、彼らが遺した『鴻跡帖』<sup>(3)</sup>は絶好の史料となる。

『鴻跡帖』の性質については、『早稲田大学百年史』（以下：『百年史』）を参考にして説明する。その第二巻には「今日、予科の学生が卒業するに際して学苑当局から請われて記した詩文・画等を集めた『鴻跡帖』が本学図書館に保存されており」<sup>(4)</sup>と記述されている。これにより、『鴻跡帖』は清国人留学生が詩文や書画などを遺した記念帳だと理解できる。

現在、清国人留学生については、多くの研究

がなされている。しかしながら、『鴻跡帖』の内容に触れた先行研究は見あたらない。本稿では、日本留学史にも、日中交流史にも重要な意義を持っている『鴻跡帖』そのものを紹介し、そこに収録された作品とその作者を分析することで、作者たちの実態や彼らの思想を考察する。さらに、同史料を通して早稲田大学清国留学生部の存立の目的と意義を再検討してみたい。

## 第1章 『鴻跡帖』の由来

『鴻跡帖』を分析する上で、まずはその由来を調べる。本章でこの問題を解明する。

### 1.1 『鴻跡帖』書名の由来

明治39年6月4日（1906年6月4日）に、清国外交官の錢恂氏<sup>(5)</sup>が早稲田大学教授の青柳篤恒氏<sup>(6)</sup>に出した書簡には、「先日の書名の件について、ご返事が遅くなってしまいまして、申し訳ございませんでした。書名を「稲泥鴻爪」<sup>(7)</sup>とするのはいかがでしょうか。蘇軾の詩にある「雪泥鴻爪」という言葉より、鴻は泥に爪の跡を残すことを表します。後世に記念を留めるという意味で用います。この「稲泥鴻爪」の四字を用いて、書を早稲田に保存する上で、

\* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程5年（指導教員 島 善高）

適切であるかどうか、青柳先生のご判断をお願いします。錢恂 陽曆6月4日」(啓者。前日委命書名、遲遲為罪。今擬四字請酌「稻泥鴻爪」。蘇東坡詩中本有「雪泥鴻爪」字、言鴻爪印於泥中、後人用為留記念之意。今用「稻泥鴻爪」四字、聊存早稻田之意、未知有當雅屬否、敬請青柳先生台安。錢恂 陽六月四日)<sup>(8)</sup>(翻刻・句読点・訳文は筆者、以下同)と記している。この書簡により、書名「鴻跡帖」の由来が明らかとなった。つまり、錢恂氏によって名付けられたということである。

## 1.2 『鴻跡帖』についての原稿募集の記事

明治39年7月(1906年7月)に発行された『早稲田学報』(以下:『学報』)に次のように掲載されている。

「稻泥鴻爪(清国留学生紀念帖) 本校清国留学生部に於て近く予科を卒へて本科に進むもの五百余名あり同部は右予科卒業生に一定の用箋を頒つて詩文書畫何にても好むに任せて揮毫せしめ之れに各個の履歷書を添え一帖に綴つて長く本館に藏し留学生の紀念に供する事とせり帖の題名「稻泥爪鴻」[ママ]は錢恂氏の撰に係る又留学生に掲示したる趣意書は左の如し。

学生諸君、予科卒業はすぐ目の前にある。卒業後は、本部本科に進学する者もいる。専門部に転入する者もいる。人によって道が違う。諸君は学問を求めるために遠くから来た。卒業帰国後、政治・教育・実業の各方面において、国家建設に尽力することであろう。本部はこれを記念するために、諸君の予科卒業の機会に、諸君が書いた書や履歷を一冊に綴じ合わせ、「稻泥鴻爪」と名付け、永遠に保存しようと思う。詩文書画に拘らない。本部は用紙を用意する。陽曆の本月十六日から、各自用紙を事務所へ取

りに行き、陽曆の七月二十日までに、揮毫を提出してください。これを諸君へお知らせする。(六月五日揭示)<sup>(9)</sup>(中国語の趣意書の原文を省略)

このように、『鴻跡帖』についての原稿募集の情報が記載されている。この募集に応じて、留学生たちは『鴻跡帖』にどのようなものを遺したのだろうか。この点を次の章で紹介したい。

## 第2章 『鴻跡帖』についての紹介

本章では、『鴻跡帖』の中身がどのようなものなのかを明らかにするため、巻数別に分けて紹介する。

### 2.1 第一冊について

第一冊の表題は「鴻跡帖 清国来賓記念」となっている。その内容は、表2-1の通りである。

表2-1 第一冊 清国来賓たちとその作品

氏名	画像番号 <sup>(10)</sup>	作品 <sup>(11)</sup>	作成時期 <sup>(12)</sup>
楊樞	6-7 <sup>(13)</sup>	作文	丙午冬日
林瀨深	8-9	作文、柳宗元「酬裴韻州二十韻詩一首」	不詳 <sup>(14)</sup>
葉爾愷	10-11	韋弘嗣「博奕論」、吳質「答魏太子箋」	不詳
錢恂	12	作文	丙午秋八月
彭祖齡	13	歐陽修「新五代史・伶官伝序」	不詳
楊熊祥	14-15	書、「庄子・秋水」	不詳
王儀通	16	作詩(七絶)	不詳
陳曾佑	17-18	朱彝尊「蕃錦集」の「蝶恋花・春暮」と「減蘭・憶別」、同氏「茶煙閣体物集」の「疎影・秋柳和李十九韵」、李良年「疎影・秋柳」	丙午八月
彭紹宗	19	「道德経」の「二十八章」、「五章」、「四十一章」、「十一章」	不詳
錫嘏	20-21	杜甫「陪鄭広文遊何將軍山林十首」の中の「其一、其二、其三、其六」、「晚行口号」、「春日憶李白」、「夜宴左氏庄」、「与任城許主簿遊南池」	丙午秋八月
吳魯	22-23	作詩、孫過庭「書譜」(上巻)	丙午秋日

氏名	画像番号 <sup>(10)</sup>	作品 <sup>(11)</sup>	作成時期 <sup>(12)</sup>
杜彤	24-25	『高啓詩選』巻三の「登西澗小閣」・「和王校理夜坐」, 巻五の「湖上見月憶家兄」・「逢吳秀才復送歸江上」, 巻六の「夜中有感」, 『高青丘集』の「曉步園池」・「寄熹公」, 高啓「与劉將軍杜文學晚登西城」	不詳
連甲	26	作詩（七律）	丙午中秋
文恆榮	27-28	黃孝邁「湘春夜月」(詞) <sup>(15)</sup> , 張惠言「憶秦娥」(詞), 歐陽修「踏莎行・候館梅殘」(詞)	不詳
黃紹箕	29	元好問「遊黃華山」	丙午冬日
李翰芬	30-31	郭璞「遊仙詩 京華遊俠窟」, 「青溪千餘仞」, 王褒「聖主得賢臣頌」	丙午秋
陳伯陶	32-33	韓非「韓非子 外儲說右下」, 米芾「弊居帖」, 同氏「珊瑚帖」	不詳
汪詒書	34-35	韓愈「与鄂州柳中丞書」, 班固「西都賦」	不詳
嚴音崇	38	作文	宣統元年八月
嚴智惺	39	作文	宣統元年八月
林兆翰	40	作文	宣統元年秋

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第一冊より作成

第一冊に寄稿した清国来賓は21名おり、彼らは当時の早稲田大学便箋を使用して1, 2枚程度の文章を書いた。文や詩を作る者もいるが、大多数は先人の詩を書き、あるいは名家の書を写していた。落款によると、作成時期は丙午の1906年、もしくは宣統元年の1909年であることがわかる。

## 2.2 第二冊について

第二冊の表紙に「鴻跡帖 清国学生畢業記念」という表題が書かれているため、本冊に収録された作品は清国人留学生が作ったものだと考えられる。本冊の内容は表2-2の通りである。

表2-2 第二冊 留学生たちとその作品

氏名	画像番号 <sup>(16)</sup>	作品	作成時期
楊奇才	3 <sup>(17)</sup>	書	不詳
王燮元	4-5	作詩（七絶）, 履歷書	明治三十九年七月

氏名	画像番号 <sup>(16)</sup>	作品	作成時期
胡蓋卿	6-9	作詩, 趙孟頫『蘭亭十三跋』の第三, 四, 十一跋, 同氏「跋定武蘭亭」, 王羲之「快雪時晴帖」, 趙孟頫跋文, 『皇帝陰符經』上編・中編	丙午陽曆六月/丙午陽曆七月十七日/丙午長夏
崔雲松	10-11	履歷書, 潘飛声「雙雙燕・和黃公度韻」	一千九百六年七月
漆仁鵬	12	作文, 作詩	不詳
胡毅	13-14	作詩, 履歷書	不詳
吳慎	15-16	範仲淹「岳陽樓記」, 作詩	不詳
陳伯璵	17-18	作詩	丙午季夏
胡遇璜	19-20	作詩, 履歷書	明治三十九年七月
柳仁嶠	21-23	作文	明治三十九年七月
鄭賓	24-25	書画, 履歷書	丙午夏/明治三十九年七月
吳欣禾	26-27	履歷書, 書	明治三十九年七月
陳同壽	28-29	履歷書, 作詩	一千九百〇六年七月
許孝綬	30-31	作文, 作詩	不詳
張浩	32-33	作詩, 履歷書	不詳
黃識	34-35	書画, 履歷書	丙午夏
胡百貞	36-37	作詩	不詳
呂学沅	38-39	作詩, 履歷書	明治三十九年六月
洪允祥	40-41	作詩, 書画	不詳
俞道暄	42-43	履歷書, 作文	丙午
楊安社	44-45	李白「將進酒」のリズムによる作詩, 履歷書	不詳
林楷	46-47	作詩, 履歷書	不詳
胡錫璋	48-49	作詩, 履歷書	一千九百零六年六月
杜俊升	50-51	梁啓超「水調歌頭甲午」, 同氏「壯別二十六首」, 同氏「汗漫錄」	明治三十九年六月
羅祥麟	52-53	書画, 履歷書, 作詩	不詳
繆其瑞	54-55	履歷書, 作詩	明治三十九年六月
梁白元	56-57	履歷書, 作詩, 書	不詳
尹欲仁	58-59	書画, 作文	不詳
范恆	60-62	作詩二首, 作文	不詳
褚辛培	63-64	書画, 履歷書	丙午年六月
李宗藩	65-66	履歷書, 作文	丙午夏
楊廉	67	作文	明治三十九年仲夏
韓書文	68-69	作詩, 履歷書	明治三十九年七月
段寶田	70-71	作詩（七律二首・七絶二首）, 履歷書	明治三十九年七月
熊成章	72-73	書画, 作詩, 李白「將進酒」, 王羲之「蘭亭集序」	丙午夏五月
劉鴻樞	74-75	履歷書, 書画	明治三十九年七月
張文煥	76-77	履歷書, 作詩（七絶五首）	不詳
趙鴻藻	78-79	作文, 韓愈「龍説」・「師説」	不詳

氏 名	画像番号 <sup>(16)</sup>	作 品	作成時期
周汝翼	80	書画	不詳
胡国樸	81	作詩	丙午天中節前日
陳培琛	82-83	作詩, 履歷書	不詳
馬樹榮	84-85	作詩, 履歷書	不詳
周家堪	86-87	書画, 履歷書	不詳
劉吉星	88	作文	不詳
張起元	89-90	作詩 (七言古詩), 履歷書	明治三十九年七月
王鑄	91	作詩	不詳
田永正	92-93	作詩, 書画	明治三十九年
劉德昭	94-95	書, 履歷書	丙午夏
印煥門	96	作詩 (七律)	丙午夏
陳錫朋	97-98	作詩, 李邕李思訓碑	不詳
陳錫恩	99-100	書画, 趙孟頫「定武蘭亭跋」, 『至寶齋法帖』第二冊「孫不廷跋」, 趙孟頫「蘭亭帖十三跋」	明治三十九年七月
黃培元	101	履歷書	明治三十九年
孟樂甫	102	作詩 (七律二首)	丙午仲夏

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第二冊より作成

本冊には、清国人留学生53名が文章や詩や書画など創作したものを収録している。また多くの者は履歷書を添付している。

第一冊と比較すると、まず身分の異なる点が注目される。第一冊は清国からの来賓が書いたものであることに対し、第二冊は留学生たちが書いたものである。続いて、創作された作品の傾向が異なっている点である。第一冊は名家の詩と文を書いたものが多数である。一方、第二冊は留学生たち自身が作った多様な作品が主体となる。そのうえ、履歷書を添えたことで、彼らの経歴を理解することができる。本冊の作品の作成時期は、「丙午」と「明治三十九年」という落款から、1906年である。

## 2.3 第三冊について

第三冊の表紙には「鴻跡帖」という表題が貼り付けてある。その内容は表2-3の通りである。

表2-3 第三冊 作者たちとその作品

氏 名	画像番号 <sup>(18)</sup>	作 品	作成時期
范之杰	4 <sup>(19)</sup>	作詩 (七律)	不詳
陳雲誥	5-6	作詩 (七律, 七絶)	丁未新秋
高毓澎	7-8	作詩 (七絶, 古体詩)	丁未八月
朱国楨	9-10	作詩 (七律), 作文	丁未孟秋
夏壽康	11-12	蘇軾「徐州蓮華漏銘」, 同氏「後赤壁賦」	丁未秋
張祖蔭	13, 33	作詩二首	丁未秋
郭則澐	14, 18	姜夔「昔游詩」, 同氏「湖上寓居雜咏」, 張耒「夜坐」	不詳
左霈	15	「黃庭堅書論」	不詳
楊渭	16, 26	承明年 詞「次潭州, 酬唐侍御, 姚員外游道林岳麓寺題示」, 作詩	丁未
張濂	17, 19	李白「古風」, 蘇軾「石恪画維摩贊」	不詳
陳善同	20, 24	袁枚「隨園詩話」, 作文	丁未孟秋
胡大勛	21, 23	作文	不詳
余炳文	22	作詩	不詳
馬振憲	25	作詩 (七律)	不詳
王壽彭	27, 32	杜甫「岳麓寺詩」・「禹廟」・「暮寒」	不詳
水祖培	28	作詩 (七律)	不詳
顧承曾	29-30	「荀子・勸学」, 「詩經・曹風・鸛鳴」, 駱賓王「帝京篇」	不詳
史寶安	31	杜甫「陪鄭廣文游何將軍山林十首」, 同氏「秦州雜詩」	不詳
張恕琳	34-35	王維「送秘書晁監還日本国」, 杜甫「嚴鄭公宅同咏竹」	丁未七月
陳樹勳	36	蘇軾「海市」	不詳
李玉振	37	庚信「哀江南賦序」	丁未中秋前
顧準曾	38-39	王維「送平澹然判官」・「送邢桂州」, 岑參「登慈持閣」, 杜甫「登兗州城樓」・「房兵曹胡馬」, 孫逖「和崔司馬登祿心山寺」, 常建「塞下曲」	丁未秋

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第三冊より作成

第三冊には、作者22名のうち、11名が詩や文を作成し、13名は先人の詩を書いた。<sup>(20)</sup>落款によると、各作品の作成時期は「丁未」と書いてあるため、1907年となる。

## 2.4 第四冊について

第三冊と同じように、第四冊の表題は表紙に書かれた「鴻跡帖」という三文字のみである。

しかし、最初のページには「予科第二次畢業生  
紀念筆墨 未装幀」<sup>(21)</sup>と書き記されているため、  
この「予科第二次畢業生」<sup>(22)</sup>は早稲田大学清国  
留学生部<sup>(23)</sup>を卒業した留学生であるとわかる。  
作品の内容と時期は表2-4の通りである。

表2-4 第四冊 留学生たちとその作品

氏 名	画像番号 <sup>(24)</sup>	作 品	作成時期
張永立	6 <sup>(25)</sup>	張之洞「勸学篇・遊学第二」	明治40年六月
武蔚青	7	諸葛亮「戒子書」, 朱熹「小学」	不詳
鄭峻德	8	書画	明治四十年五月
孔繁泰	9	韓愈「八月十五夜贈張功曹」	明治四十年仲春
王英濤	10	書画	不詳
劉炯	11-12	王維「送元二使安西」, 杜牧「寄揚州韓判官」, 張繼「楓橋夜泊」, 履歷書	不詳
劉章瑞	13, 77-78	書画, 作詩 (七絶), 作文	光緒三十三年
蕭集崑	14	書画	不詳
嚴毅	15	書画	不詳
鍾海峯	16-17	履歷書, 王維「老将行」	丁未
藍鼎中	18-19	作文, 書画	明治四十年五月
李国珍	20	書	丁未
吳煥然	21-22	書画, 作詩	明治四十年五月
張善興	23-24	作文	不詳
殷廷璋	25	作詩	明治四十年
何煥時	26-27	序文, 作詩 (詠懷十二絶)	丁未夏
岳秀峯	28-29	序文, 作詩, 書画	丁未五月
周毓岐	30-31	序文, 作詩, 書画	丁未四月
劉啓晴	32-33	作文	明治四十年五月
陳伊炯	34	作文	不詳
周元燠	35	作文 (「大隈伯爵氏銅像贊並叙」)	明治四十年五月
張銳	36	序文, 作詩 (七律二首)	丁未夏
蔣曦明	37	作詩 (七律二首)	不詳
黃耀鳳	38-39	序文, 作詩作詞 (七律, 詞), 書畫 (七絶付き)	丁未五月
廖子璦	40	履歷書, 作詩 (七律二首)	明治四十年五月
袁灼	41	作文	丁未四月
張振鏞	42-43	序文, 作詩 (七律), 書画 (文付き)	丁未陰曆夏四月
徐炳元	44	郭璞『游仙詩』の「京華游侠窟」・「青溪千余仞」・「六龍安可頓」	不詳
曾有淵	45	作詩 (七絶四首:「春夜游不忍池畔」・「初夏游上野公園」・「膜拜西郷隆盛翁」・「亀井戸觀梅」)	不詳

氏 名	画像番号 <sup>(24)</sup>	作 品	作成時期
周道萬	46-47	杜甫「愁」・「曉發公安」, 作文	明治四十年五月
韓應房	48-49	作文, 書画	丁未
宗奇	50	書畫	不詳
劉和理	51	作詩, 作文	丁未夏
安兆鼎	52	作詩	丁未
劉濂	53	作詩 (七絶四首:「富士山」・「不忍池」・「亀井梅」・「上野櫻」)	不詳
傅錫鴻	54-55	作文, 作詩 (七律四首)	明治四十年丁未春末
黃紹魯	56	徐陵「玉台新咏序」	不詳
舒祖勳	57	序文, 作詩 (七律)	明治四十年六月
吳冠英	58-59	履歷書, 作詩 (七律三首:「夜宴日比谷公園」)	丁未夏
唐重華	60	序文, 作詩 (七絶二首)	不詳
夏嵩	61	作文	明治四十年夏
張乙林	62	黃遵憲『日本雜事詩』卷一	丁未夏
敬心地	63	作詩 (古体詩・七律各一首), 履歷書	不詳
湯增璧	64-66	作詩三首	不詳
劉生麗	67	作文	不詳
王曉東	68	作詩	明治四十年六月
烏爾濱珍	69	書	不詳
左海濤	70	作詩 (七律)	不詳
賀嗣章	71-72	書	丁未夏
羅儀藻	73	書画	不詳
成贊	74	序文, 作詩 (七絶六首)	明治四十年六月
向逢時	75-76	作詩, 作文	明治四十年夏
林東森	79-80	作詩	明治四十年夏
冷天才	81-82	作詩, 作文「絶望為腐敗分子論」	不詳
何煥奎	83	履歷書, 作詩	不詳
柳乙青	84-85	作文, 書画 (七絶付き)	光緒三十三年
林任輿	86	書	不詳
陳鴻疇	87	作詩	丁未春
汪東	88-89	書画 (五絶付き), 作詩 (五律三首), 作詩「宝剑篇」	不詳
朱鴻鐸	90-91	書画, 字句 (篆書), 作詩 (七絶二首)	不詳
黃秉初	92	作詩, 後書	丁未夏
蔣謨草	93	作詩	不詳
段世垣	94	序文, 作詩 (七律四首)	丁未夏
王曾培	95	作詩, 履歷書	明治四十年夏六月
李士燾	96-97	作詩 (七絶五首), 後書, 履歷書	丁未
李光綸	98	黃庭堅「書幽芳亭」	不詳
倪亞鳴	99-100	序文, 作詩 (七絶二首・七律一首)	明治四十年夏六月
張萬鵬	101	作詩二首	不詳
王丕祺	102	作詩 (五律四首)	不詳

氏 名	画像番号 <sup>(24)</sup>	作 品	作成時期
雪父学	103	作文	皇帝紀元四千六百零五年
黄化字	104	作詩（五律）	丁未
胡蕙	105	序文，作詩（七律四首）	大清光緒三十三年五月
楊錫瓚	106	作詩	不詳
蕭增秀	107	Francis Bacon <sup>(26)</sup> 「Vain-glory」による訳文	丁未夏
崔鎮岳	108	作文	明治四十年五月
陳受中	109	作文	明治四十年夏五月
羅家衡	110	詞「烹天楽・小対竹軒坐雨」，詞「江城梅花引・苦雨夜坐」	不詳
楊涵馨	111-112	梁啓超「中国地理大勢論」	不詳
盛鐘靈	113	書画	丁未夏
紀萬縉	114-115	序文，作詩（七絶二首），書画	丁未夏
劉長譽	116	陶淵明「帰去来辞」	丁未夏
張家珩	117	作詩（七律二首）	明治四十年七月
唐忠信	118	書	不詳
陳祖虞	119-120	履歷書，作詩（七律二首）	不詳
劉嘯	121-122	作詩	不詳
程蘭湘	123	書画（七絶付き）	不詳
黄紹樞	124	書画	不詳
黄玉溶	125	作詩	明治四十年仲夏月
譚煥章	126	作詩（五絶四首），後書	明治四十年七月
邱冠榮	127	作文	一千九百零七年七月
張麓	128	龔自珍「餽鮑誦」・「黄憤誦」	丁未夏
羅本擴	129	序文，作詩（七律）	西曆一千九百零七年
黄爵文	130	『真山民詩選』	明治四十年夏
潘学海	131	書画	不詳

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第四冊より作成

予科第二次卒業生総数381名のうち，第四冊に作品を遺した学生数は94名（全体の約25%）である。彼らの作品は前の三冊と同じように，先人の詩文と自作の詩文の二種類がある。作成時期は「明治四十年」，「丁未」，「光緒三十三年」，「皇帝紀元四千六百零五年」，「1907年」などと記されており，すべて，1907年である。

## 2.5 第五冊について

第二冊と同じように，第五冊の表紙には「鴻跡帖 清国学生畢業記念」という表題が書かれている。そのため，本冊も清国学生が作った作品であろうと判断できる。以下，表2-5にその内容を記す。

表2-5 第五冊 留学生たちとその作品

氏 名	画像番号 <sup>(27)</sup>	作 品	作成時期
汪翔	3-5 <sup>(28)</sup>	作文「稻泥鴻瓜自記」，「大隈伯肖像賛」，「七夕感詞」，「下宿屋銘」	丙午七月
董鴻禕	6	作文	不詳
蹇念益	7-8	履歷書，老子『道德經』第十一章・第十二章	明治三十九年丙午七月
方樞	9-10	作文，履歷書	丙午年七月/明治三十九年七月
孫家樹	11-12	作詩（七絶六首），履歷書	丙午夏七月
紀文瀚	13-14	履歷書，作詩	不詳
張烈	15-16	作詩，履歷書	中国開国紀元四千六百零四年/明治三十九年
湯鐵樵	17-20	履歷書，作文，作詩（七絶八首）	中国皇帝紀元四六〇四年/明治三十九年七月
王懋昭	22-23	作文，書画（七絶付き）	明治三十九年
汪德林	24	作詩（七絶四首）	不詳
張若寬	25, 90	書画，履歷書	丙午五月/光緒三十二年五月/明治三十九年七月
高国瑛	26-27	作文「日本留学梗概説」，「暑中休暇放歌」	不詳
夏道沛	28-29	履歷書，杜甫「後出塞五首」の一つ，後書	丙午夏
劉東漢	30-31	履歷書，書画	明治三十九年七月/光緒三十二年五月
汪慶萊	32-33	作文，履歷書	明治三十九年七月
張開運	34-35	履歷書，作詩（七律二首）	明治三十九年七月/光緒三十二年五月
劉彥	36-37	作文，作詩（七絶四首：「傷西力東漸」，「傷東亜平和」，「中国之前途」，「学生之責任」）	西曆一千九百零六年七月
黄鳴盛	38-39	前書，作詩（五律），書画	明治三十九年七月/光緒三十二年五月
夏掄升	40-41	履歷書，作詩（七律），作文	不詳

氏 名	画像番号 <sup>(27)</sup>	作 品	作成時期
張宗華	42-43	履歴書, 書画	光緒三十二年五月/明治三十九年七月
張仁銳	44-45	履歴書, 書	明治三十九年七月/光緒三十二年五月
德林布	46-47	履歴書, 作詩	不詳
張青選	48-49	履歴書, 對聯	明治三十九年七月
嚴福松	50-51	履歴書, 「留別早稲田大学校七律二章」	不詳
解樹強	52-53	履歴書, 書画	丙午夏
楊奇才 <sup>(29)</sup>	54	『後漢書・卷四十七・班梁列傳第三十七』	不詳
呂邦棟	55-56	履歴書, 作詩	不詳
方體華	57-58	作詩 (七律二首), 履歴書	丙午夏
杜用選	59	作詩 (七律二首)	丙午七月
袁登	60-61	作詩 (七律二首), 履歴書	丙午夏七月
陳曾斌	62-63	履歴書, 書画	丙午夏
藍經惟	64-65	作詩 (七律・七絶各一首), 書画 (七絶付き)	明治三十九年七月
賴承奎	66-67	『王安石文集・慈溪縣學記』, 履歴書	不詳
隆福	68	作詩 (七律二首)	丙午夏
永元	69	作詩 (七律)	不詳
崇貴	70	作詩 (七律)	不詳
春保	71	作詩 (七絶)	不詳
松林	72	作詩 (七律)	丙午夏
穆都哩	73	作詞「西江月」	不詳
常順	74	作詩 (七律)	不詳
存忠	75	作詩 (七絶)	不詳
定安	76	作詩 (七絶)	丙午夏
黃榮惠	77	作詩 (七律)	不詳
恒鈞	78	作詩 (七律)	丙午夏
延年	79	作詩 (五絶四首)	丙午夏
全桂	80	作詩 (七絶二首)	不詳
世謙	81	作詩 (七律)	不詳
榮生	82	作詩 (七律二首)	不詳
柯興魁	83	作詩 (七絶)	丙午夏
錫寶	84	作詩 (七律)	丙午夏
德啟	85	作詩 (七律)	丙午夏
恒隆	86	作詩 (七律)	不詳
崇文	87	作詩 (七律)	不詳
文元	88	作詩 (七律)	不詳
吳乃璋	89	書画	丙午七月
童振鏞	91-92	書, 作文	明治三十九年七月
張福年	93-94	履歴書, 作詩 (七律), 後書	明治三十九年七月
劉同彬	95-96	履歴書, 作文	明治三十九年七月
袁家普	97-98	作文, 作詩 (七絶四首: 「日本与中国之将来」, 「日本国民与中華国民之責任」, 「學生之裏感」, 「學生對於學校之希望」)	西曆一千九百零六年七月

氏 名	画像番号 <sup>(27)</sup>	作 品	作成時期
潘自潛	99-100	履歴書, 作文	明治三十九年七月
谷鐘秀	101-102	作詩 (七律), 履歴書	不詳
郭憲章	103-104	『挺經』卷六, 履歴書	不詳
劉蔭榕	105-106	履歴書, 作詩	丙午夏
張務本	107-108	履歴書, 作詩 (七絶二首)	不詳
王庚西	109-110	履歴書, 作詩 (七絶三首)	明治三十九年七月

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第五冊より作成

第五冊には清国留学生64名の作品が収録されている。自作の詩文や書画などを書いた留学生は60名であり, 先人の名詩・名作を書いた留学生は4名である。本冊の作成時期は, 「丙午」, 「明治三十九年」, 「中国開国紀元四千六百零四年」, 「中国皇帝紀元四六〇四年」, 「光緒三十二年」, 「西曆一千九百零六年」などの多様の書き方で書き記されており, これらは1906年のことを指す。本冊と第二冊の作品の作成時期はともに1906年であり, 表題も同じように「鴻跡帖 清国学生畢業記念」と書かれている。そのため, 第五冊と第二冊は, ともに1906年の卒業生が書いたものと推測できる。

## 2.6 第六冊について

第六冊の表題は「鴻跡帖」とある。その内容は以下の表2-6にまとめた。

表2-6 第六冊 作者たちとその作品

氏 名	画像番号 <sup>(30)</sup>	作 品	作成時期
溥倫	6 <sup>(31)</sup>	署名「丁未十一月六日大清国貝勒銜固山貝子溥倫」	丁未十一月
載振	8	署名「宣統元年五月十七日載振」	宣統元年五月
溥侗	10	署名「宣統二年二月二十一日 大清国公銜鎮国將軍溥侗」	宣統二年二月
達壽	13	署名「戊申五月參觀早稲田大学留題 達壽」	戊申五月

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第六冊より作成

本冊に収録した作品は、清国の皇族、官員など身分の高い人物4名が署名したものである。本冊の内容から、彼らが早稲田大学を見学したことがわかる。その様子は、『学報』に掲載されている。

まず、記事「清国答禮大使溥倫貝勒<sup>(32)</sup>殿下の臺臨」<sup>(33)</sup>より、溥倫は1907年12月10日に早稲田大学を見学した。『鴻跡帖』の落款の丁未十一月六日<sup>(34)</sup>と同日で、見学の日に書を書いたと判断できる。

続いて、「早稲田邸の振貝子<sup>(35)</sup>」を表題とする記事<sup>(36)</sup>より、載振は、1909年7月4日に早稲田大学を見学したことがわかる。この日付は『鴻跡帖』にある落款の宣統元年五月十七日<sup>(37)</sup>と同日である。「青柳氏よりの大学所蔵の記念帖に揮毫を約し」<sup>(38)</sup>という文から、見学の当日、彼は『鴻跡帖』に書を寄せていたことがわかる。

また、記事「清国兩殿下の臺臨」<sup>(39)</sup>より、溥侗は1910年4月2日に早稲田大学を見学したことがわかる。同記事の中の「溥侗公の教育観」には、「頗る伯とお話が合つて殿下には「宣統二年二月大清国公衡鎮国將軍溥侗」と手書きして是を伯に與へられた」（下線は筆者）と書かれている。下線を引いた箇所を『鴻跡帖』に遺された書と結びつけると、大隈総長に贈った書が『鴻跡帖』に収録されたと判断できる。『鴻跡帖』に載せたその書の期日は「宣統二年二月二十一日」と書かれており、すなわち陽暦の3月31日<sup>(40)</sup>である。見学日の4月2日の前に、書を用意しておいたと考えられる。

最後に、達壽が見学した時の様子を紹介する。記事「清国憲政大臣来校」<sup>(41)</sup>に、「清国出使考察憲政大臣達壽氏は随員二名を従へ五月二十六日午前十時来校」と書かれている。当日

は、1908年5月26日であり、『鴻跡帖』にある落款の戊申五月と一致しているため、見学の際に書を遺したと推測される。

このように、留学生たちのみならず、皇族・官員などの高い身分の人物が『鴻跡帖』に登場していたことから、当時の早稲田大学と中国の各階層とは緊密に繋がっていたと考えられる。世界に遅れる中国は、早稲田大学という窓口を通して近代国家の先進的な知識・技術・思想・文化を吸収していったとも考えられる。

## 2.7 第七冊について

第七冊は表題が付いていないが、その内容は表2-7の通りである。

表2-7 第七冊 作者たちとその作品

姓 名	画像番号 <sup>(42)</sup>	作 品	作成時期
李超群	4 <sup>(43)</sup>	作詩（七律二首）	不詳
汪慶棠 <sup>(44)</sup>	5-6	李善蘭『談天序』	不詳
黄星華	7-8	浦松齡『聊齋誌異・絳妃』	不詳
柳景元	9-10	作詩八首	不詳
馬毓驥	11-12	作詩六首	不詳
蘇澄識	14-15	序文、作詩（七言古詩）	明治四十一年六月
楊道淵	16-17	作詩（七律二首：「詠懷」 「詠世」）、後書、書画（七 絶付き）	明治四十一年夏
胡豫識	18	作詩（七律二首：「自歎」 「感事」）、後書	戊申夏
姚煥	19-20	作詩（七律二首）、履歷書	明治四十一年六月
程良楷	21-22	作詩、履歷書	光緒三十四年七月
陳錫朋 <sup>(45)</sup>	23-24	陶淵明「歸去來兮辭」、李 商隱「賈生」、楊万里「曉 出淨慈寺送林子方」	不詳
張起元 <sup>(46)</sup>	25	作詩（七律）	不詳
謝德銘	26-27	作詩（七律二首）、履歷書	不詳
寅汝義	28-29	作詩（五言古詩）	戊申
魏慶江	30	作文	不詳
王振聲	31-32	韓愈「馬説」、履歷書	明治四十一年七月
黄人望	33	蘇軾「賈誼論」	明治四十一年七月
徐敬熙	34-35	作詩、履歷書	明治四十一年六月
楊文洵	36	老子「道德經」第四十七、 四十八、四十九章	明治四十一年六月

姓 名	画像番号 <sup>(42)</sup>	作 品	作成時期
崇貴 <sup>(47)</sup>	37	書画	戊申荷月
徳放 <sup>(48)</sup>	38	書画	戊申荷月
柯興魁 <sup>(49)</sup>	39	書画	戊申荷月
桂陞	40	書画	戊申夏
存忠 <sup>(50)</sup>	41	書画	戊申夏五月/ 明治四十一年 六月
聶登期	42-43	厳復『天演論』(下) 論 十一、論三・教源	不詳
謝鍾靈	44-46	作文「留学早稲田大学畢 業雪泥鴻爪紀念文」	明治四十一年 戊申七月/光 緒三十四年六 月
胡文藻	47-48	龔自珍『龔自珍全集』上海 古籍出版社 1975 P486, 龔自珍「自春徂秋得十五首」 の中の二首、同氏「燕昭王 求仙台賦」	戊申七月

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』第七冊より作成

第七冊には20名の作品を収録している。作品の内容は、詩や文や書画を作った人は14名であり、先人の作品を書いた人は6名である。作成時期は、前冊のように多様の書き方で記入されているが、1908年であると考えられる。

### 第3章 『鴻跡帖』に関わる作者と作品

本章では、『鴻跡帖』に関わる作者と作品について、いくつかの事項別にその傾向をまとめる。

#### 3.1 作者について

まず、『鴻跡帖』に関係する作者の総人数と彼らの身分について改めて整理する。

##### 3.1.1 作者の総人数

全七冊に収録されている作者の人数は、表3-1に巻数別に整理した。

第一冊の作者数は21名、第二冊53名、第三冊22名、第四冊94名、第五冊64名、第六冊4名、第七冊20名となり、総人数は278名である。

表3-1 作者の人数統計表

	第一冊	第二冊	第三冊	第四冊	第五冊	第六冊	第七冊
人 数 (人)	21	53	22	94	64	4	20
総人数 (人)	278						

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』全七冊より統計

#### 3.1.2 作者の身分

続いて、作者の身分を明らかにした。『鴻跡帖』を解読して、各冊に作品を遺した作者たちの身分がほぼ明らかになった。その内訳を表3-2に整理した。

表3-2 作者たちの身分について

	題 名	身 分	備 考
第一冊	「鴻跡帖 清国来賓記念」	清国要人	表題は白地に縦書きで記入されている押印がある
第二冊	「鴻跡帖 清国学生畢業記念」	明治39年清国留学生部予科第一回卒業生	表題は白地に縦書きで記入されている押印がある
第三冊	「鴻跡帖」	進士	表題は橙地に縦書きで記入されている
第四冊	「鴻跡帖」	明治40年清国留学生部予科第二回卒業生	表題は白地に縦書きで記入されている 最初のページに「予科第二次畢業生紀念筆墨」が書き込まれている
第五冊	「鴻跡帖 清国学生畢業記念」	明治39年清国留学生部予科第一回卒業生	表題は白地に縦書きで記入されている押印がある
第六冊	「鴻跡帖」	皇族・官員	表題は赤地に縦書きで記入されている
第七冊	無	明治41年清国留学生部師範本科第一回卒業生	無

『鴻跡帖』全七冊、『早稲田学報』明治39年第137号P62-64、明治40年第150号P54-60、明治41年第162号P22-29各年度卒業生名簿より作成

第一冊は清国の要人たちが書いたものである。

第二冊と第五冊は、清国留学生部予科第一回卒業生が記念に書いたものと推測される。

第三冊と第六冊の題名は具体的に書いていな

いが、「鴻跡帖」の三文字は橙と赤の下地に書かれている。これは、他の冊に使用された白い下地に比べると目立ったものになっている。この中では、第三冊に関する作者の身元は、その内の一人が落款のところに「清国編脩官<sup>(51)</sup>楊渭書」<sup>(52)</sup>というように書いているため、その肩書きを手懸かりとして調査を行った。その結果、本冊に登場する22名の内、21名が1903年に科挙<sup>(53)</sup>で進士<sup>(54)</sup>になった者であることがわかった。<sup>(55)</sup>また、第六冊は身分が高い皇族・官員4名が署名したものである。

第四冊には「予科第二次畢業生紀念筆墨」というページがあるため、留学生たちが書いた記念作品であると考えられる。

最後の第七冊は、表題が付いていないが、その内容から、大多数は清国留学生部師範本科第一回卒業生だと判断できる。

### 3.2 作品について

次に、『鴻跡帖』に遺された作品の長さ、種類、作成時期の三つのポイントから説明する。

#### 3.2.1 作品の長さ

まず、掲載されている作品の分量に注目する。全七冊に載せた記念文の量からみると、早稲田大学用箋で1,2枚程度の分量の作品が多い。

#### 3.2.2 作品の種類

次に、『鴻跡帖』に載せた作品の種類に注目する。その内容からみると、先人の詩文を書いたものと自作の詩文を書いたものの二種類あることがわかる。この二種類の作者の人数を調べてみると、以下の表3-3の通りである。

表3-3において、冊ごとに先人の詩文を書

表3-3 作品の種類別の人数統計表

冊数 (冊) \ 人数 (人)	先人の詩文 (割合) <sup>(56)</sup>	自作の詩文 (割合) <sup>(57)</sup>	冊別の 合計
第一冊	14 (58%)	10 ( 42%)	24
第二冊	8 (13%)	52 ( 87%)	60
第三冊	13 (54%)	11 ( 46%)	24
第四冊	17 (17%)	82 ( 83%)	99
第五冊	4 ( 6%)	64 ( 94%)	68
第六冊	0 ( 0%)	4 (100%)	4
第七冊	6 (30%)	14 ( 70%)	20
種類別の合計	62 (21%)	237 ( 79%)	299

早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている『鴻跡帖』全七冊より統計

いた人数と詩文を作った人数を、それぞれ「先人の詩文」と「自作の詩文」の欄を設けて分類した。上述した二種類の作品については、各々の作者の人数割合を、その関連データも含めて整理している。しかし、ここでまとめた冊別の総人数は表3-1に記入した各冊の総人数とは一致しない。その理由は、一部の作者は先人の詩文と自作の詩文の両方を書いているためである。そのため人数に違いが生じるのである。

表3-3を分析してみると、先人の詩文を書いた人数が21%を、自作の詩文を書いた人数が79%を占めている。つまり作品を自ら作成した者が多かったということである。とりわけ、清国人留学生が書いた第二、四、五、七冊の中では、文章を自作した者は各々87%、83%、94%、70%と多数を占める。自作の作品を通じて、留学生たちが個人的な考え方を率直に表そうとした気持ちを窺うことが出来る。

#### 3.2.3 作成時期

『鴻跡帖』の中の作品が作られた時期を、表3-4にまとめた。

まずは「落款による作成時期」の欄に注目したい。これは各作品にあらわされた年代の書き

表3-4 作成時期についての換算表

冊数	落款による作成時期	西暦換算
第一冊	丙午, 宣統元年	1906, 1909
第二冊	丙午, 明治三十九年	1906
第三冊	丁未	1907
第四冊	明治四十年, 丁未, 光緒三十三年, 皇帝紀元四千六百零五年, 一千九百零七年	1907
第五冊	丙午, 明治三十九年, 中国開国紀元四千六百零四年, 中国皇帝紀元四六〇四年, 光緒三十二年, 西暦一千九百六年	1906
第六冊	丁未, 宣統元年, 宣統二年, 戊申	1907-1910
第七冊	明治四十一年, 戊申, 光緒三十四年	1908

『鴻跡帖』全七冊, 鄭鶴声『近世中西史対照表』P781-790より作成

方をまとめた情報である。ここから見ると、当時留学生は母国文化、留学先の日本の文化、西洋文化などの影響を受けて、年代に関する書き方が多様化していたことがわかる。この点から、留学生全体が異国文化に対する受容の姿勢と、民族としてのアイデンティティを保持していたという両面がうかがえる。

次に、「西暦換算」の欄に注目したい。ここは、西暦に換算した年代を記入している。具体的に見ていくと、第一冊に使用された各作品に関する年代の記し方は、1906年と1909年の二つがあった。第二冊は1906年、第三冊は1907年、第四冊は1907年、第五冊は1906年、第六冊は1907年から1910年までの間、第七冊は1908年となっていた。つまり、『鴻跡帖』とは、1906-1910年の五年間にわたって作成された作品集であることがわかる。この五年間は、早稲田大学清国留学生部の存立期間（1905-1910）とほぼ一致している。

清国留学生部について、その開設の背景と目的、運営の経緯、閉鎖の原因などの歴史が『百年史』<sup>(58)</sup>に詳しく掲載されている。その中で、清国留学生部の開設の目的は以下の三点があげられる。一つ目は、「清国の教育事情か

ら、先づ教員を養成すると云ふことが最も急務であると云ふ所から依頼を受けましたので、夫れが為めに清国留学生部と云ふものを開く」<sup>(59)</sup>という「清国政府の教育行政の肩代りであった」<sup>(60)</sup>という点である。

二つ目は、清国国内の改革派に対する対策という点である。張之洞<sup>(61)</sup>は高田早苗学監と面会した際、「日本に学生を派遣すると危険思想にかぶれはしないかといふ事を、深く憂へて居つた」<sup>(62)</sup>。これに対して、高田学監は「其れが心配なら、成るべく長く留学させるが宜しいのである。往年我日本から欧米へ留学した人々に就て見ても、深く学問した人は共和主義などにかぶれる者は無かつたが、然うでない者の中には随分危激な議論を帰朝後にした者もある」<sup>(63)</sup>と答えた。このように清国留学生部特有の長期教育は「清国政府の革命派対策にとっても有効な処方」<sup>(64)</sup>であり、すなわち、清国留学生部の教育は清国政府の「革命思想対策の代行」<sup>(65)</sup>という側面もあったということである。

三つ目は、「一人の支那青年を多く養成するは、日本の勢力を一步支那大陸に進むる所以の大計たるを認識せられざるか」<sup>(66)</sup>という点。つまり、日本の対中国進出に有益でもあった点である。

清国留学生部がその目的を達成したかどうかを確かめるために、留学生に関わる『鴻跡帖』はそれを考察する重要な糸口となると思われる。

以上、『鴻跡帖』について、作者と作品の両面から、その関連内容を紹介し、分析した。次の節で、『鴻跡帖』から見る清国留学生部の存立意義は何であろうかという問題を解明してみたい。

### 3.3 『鴻跡帖』から見る清国留学生部の開設 目的と存立意義

本節では、清国留学生部が開設の目的を達成できたのかという問題と、清国留学生部の存立意義について、『鴻跡帖』の中の作者たちと彼らの作品の検討を通して考察する。

まず、開設の目的の一つ目は普通教育と教員養成の代行となることである。これを考えるには、教員として、学問に対する認識が十分あれば、その一つ目の目的はある程度で達成されるところと考えられる。留学生の一人として、劉同彬（明治42年卒、教育及歴史地理研究科）を例に彼の文（『鴻跡帖』第五冊）を事例として考察する。

劉同彬は日本に留学した後、帰国して北洋法政学堂で教員となった人物である。<sup>(67)</sup>

学問について、彼は以下のように論じていた。「学問がなければ生活できないわけではないが、国家の強弱存亡は学問の有無によって変わるのである」と学問の必要性を力説した。

続いて「それゆえ、学問を探究するのは人生にとって第一の要務である」。「中古以前の学問は一国の中でなされるものであり、当時の人はただ一国の学問だけ探究していた」と学問に励む重要性および古代における学問探究の方法を述べていた。

さらに「近代以来、各国が近隣の如く交わるようになったため、一国の学問のみで世界の事情に通じることは難しいことである」と近代に入って一国の学問だけで世界の事情が理解しにくいことを論じていた。

そのため「知らない者は知る者に知識を求める。無能な者は有能な者に能力を求める。このように、相互に学び合ってともに進歩する。これは学問の範囲が大きければ大きいほど、学問

に励む道も益々広くなる」というように、学問は競争し合いながら、協力し合っているため、互いに高め合うことを述べている。

学問の認識が深いからこそ、このような文が成立するのではないか。劉同彬のような教育者は留学生たちの中で最も多い。<sup>(68)</sup>これは教員養成の目的が実現した証拠だと認められよう。

続いて、その「革命思想対策の代行」の目的を遂げたかどうかについては、帰国後、革命家として活躍していた段世垣（明治40年卒、予科第二回卒業生）の文を挙げて考察する。

段世垣は河南議會議員、国会參議院議員、憲法起草委員会委員、民国大統領の袁世凱の大統領府の秘書などを歴任した。袁世凱に反対する活動を行ったため、密殺されたのである。<sup>(69)</sup>

国のために、命を捧げた段世垣は七言律詩四首を作った。（『鴻跡帖』第四冊）

第一、二首は国運を憂慮して悲しみに沈んでいる気持ちを表した。

第三首は日中関係を論じていた。日中両国は昔から「唇と齒は互いに頼る」というように、互いに密接な関係にあった。しかし、現今の関係は冷たくなってきた。そして、「黃禍」<sup>(70)</sup>を取り上げて、白色人種と黄色人種の対立を述べた。

そして第四首では、中国がいつか欧米各国に勝って、世界に聳え立てるように望んでいる。

以上、革命家の一人として、段世垣の例を挙げた。彼が作った詩文から、革命・戦争は、国を強くするという主張が窺える。彼の思想が帰国後の経歴にも反映しているため、彼の思想と行動は終始一貫していたことも理解できる。

清国留学生部には、段世垣のような革命運動に参加した者が少なくない。<sup>(71)</sup>そのため、高

田早苗が述べた「革命思想対策の代行」の目的に反する結果となった。

最後に、清国人留学生に対する教育は中国進出に有益なものだと判断できるかという問題に答えるため、張振鏞（明治40年卒、予科第二回卒業生）と邱冠棻（明治40年卒、予科第二回卒業生）の二人の文を挙げて検討したい。

張振鏞は明治40年（1907年）、清国留学生部を卒業した後、専門部政治経済科に進学し、明治43年（1910年）、卒業した。<sup>(72)</sup>彼が書いた文（『鴻跡帖』第四冊）は以下のようなものである。

「大隈伯爵は新学を提唱し、政界に資金を援助した日本の偉人の一人である」。「大隈伯爵は日中両国が親密な関係を築くことに心を砕いている。これを以って西欧に対抗するのは道義上拒否できない」。

この文は、大隈重信への称賛および大隈が日中両国の友好関係を築き、欧米に対抗できると望んでいたことを述べている。

邱冠棻は江西理財局局長、財政司主計科科长、衆議院議員、江西法政学校の教員などを歴任した。<sup>(73)</sup>彼の文（『鴻跡帖』第四冊）を読みると、早稲田大学と総長への感謝の念が溢れている。

総長が留学生たちに文章などを書かせることに対して、「考えが深く、人情が厚い」と高く評価した。また、「私は同級生皆が世界に功績をあげて、この厚い人情と意味深い言葉に背かないよう願っている」と書いてあるように、再び総長の厚意を強調し、これに感謝するため、私たちが力を尽くして功績をあげると主張した。

上述した二人以外にも、多くの留学生たちが早稲田大学と総長・諸先生への感謝および国家建設に貢献するという真心を詩・文にあらわし

た。この点からみると、清国人留学生に対する教育を通じて、親日の留学生が増えてきたと言える。そしてこれは日本の中国進出に有益なものであったと判断できるだろう。

以上、清国留学生部の開設の目的を達成できたか否かについて論じた。ここでまとめてみると、一つ目の「教育の代行」という目的は実現した。二つ目の「革命思想対策の代行」という目的は遂げない結果となった。そして三つ目の「中国進出」という目的は達成した。

このように、清国留学生部の存立意義もまとめられる。「教員養成」を目指した清国留学生部の中では、最も多い教育者は中国の教育の近代化に寄与した。「革命思想対策の代行」の目的は達成できなかったが、多数の政治家と革命家が養われた。彼らは政治改良、国家建設に貢献した。留学を通じて、留学生たちは日本の動き、中国の勢い、日中関係の思慮、国際情勢などの問題に注目し始めた。これらは『鴻跡帖』に反映されている。日本が信頼できる国だと思った者が少なくないが、一方で日本と中国の間に、また戦争があると考えた者もいた。国際情勢が絡み合った当時に、留学生たちの思想は複雑な様相を呈している。近代における知識人としての留学生たちは、彼らの思想が代表的なものだと考えられる。そのため、彼らの思想を通して、知識人の階層の思想も窺える。

## おわりに

本稿では、清国人留学生に関わる史料『鴻跡帖』を紹介し、その作者と作品の両面から考察した。その結果は以下のようにまとめられる。

### ①『鴻跡帖』の作者の身分について

本稿の冒頭に掲げている『百年史』の記述よ

り『鴻跡帖』に文を揮毫した作者たちの身分は明らかとなったが、完全ではない。本稿では、『鴻跡帖』に関する作者たちは「予科の学生」のみならず、師範本科第一回卒業生も含まれるうに、さらに清国の要人、進士、皇族・官員というような留学生以外の者の文章も収録されていることを明らかにした。

## ②『鴻跡帖』の作者の思想について

留学生たちの考えが『鴻跡帖』全七冊に反映している。具体的には、日中両国が友好関係を永遠に保つと信じていること、日本、特に早稲田大学に感謝すべきだと考えていること、故郷を偲んで母国を懸念している感情を持っていることであり、これらは一般的な言論である。これに加えて、日中関係を憂える文章も書き記されている。

## ③『鴻跡帖』から見る清国留学生部成立の目的と意義

清国留学生部を開く目的は『百年史』に掲載されている。しかし、『鴻跡帖』に関する内容を踏まえて、清国留学生部成立の目的と意義を検討していない。今回、史料『鴻跡帖』を駆使して、その目的の達成と意義を考察した。

本稿では、『鴻跡帖』に関して代表的な人物のみを挙げて、その人物紹介と作品分析を進めた。しかし、これは不十分であり、掘り下げる余地があると考え。そのため、今後の研究では、本稿では省略した作者全員の調査と作品全体の分析を行う予定である。

[投稿受理日2015.12.19／掲載決定日2015.12.22]

## 注

- (1) 本稿での日時の表記は、日本関係の事項が日本の年号を、清国関係の事項が清国の年号を基本とする。西暦を括弧内に補記する。また、史料を引

用するとき、中国語の繁体字と日本語の旧字体を、適宜に日本語の新字体に変換した。

- (2) 『官報 游学生監督処』光緒32年12月第1期P24-39
- (3) 『鴻跡帖』は早稲田大学図書館所蔵、全巻七冊。
- (4) 『早稲田大学百年史』第二巻 P180
- (5) 錢恂は清末、外交官として活躍し、草創期の早稲田大学図書館に多くの漢籍を寄贈し、多大な貢献をした人物。(高木理久夫「錢恂年譜(増補改訂版)」『早稲田大学図書館紀要』第60号 2013 P108より)
- (6) 青柳篤恒は中国学者、政治・外交論説家。(中村義『近代日中関係史人名辞典』P5より)
- (7) 「稲泥鴻爪」とは、稲のたんぼに鴻が爪跡を残すこと。「鴻爪」は蘇軾の詩による語。(鴻が南に来る時には、後の心覚えに雪に爪痕をつけるが、北に帰る時には、雪とともにその痕が消えていることからいう) 往時の痕跡。また、跡形が残らないこと。「雪泥の鴻爪」ともいう。
- (8) 「錢恂書簡」は早稲田大学図書館所蔵。
- (9) 『早稲田学報』明治39年7月発行第135号 P63
- (10) 第一冊に画像番号「chi03\_01080\_0001\_p0001」から「chi03\_01080\_0001\_p0043」まで、画像43枚を収録。
- (11) 「作品」欄に、「七律」とは「七言律詩」の略、「七絶」とは「七言絶句」の略、「五律」とは「五言律詩」の略、「五絶」とは「五言絶句」の略。以下同。
- (12) 作成時期は原文のまま記入。具体的な期日を記入することは省略。以下同。
- (13) 資料画像の表記は以下のように簡略化する。元画像番号「chi03\_01080\_0001\_p0006」の場合、「6」という表記に簡略化する。画像「1」が表紙、「43」が裏表紙。画像「5」は「6」と同じページで記入を省略。
- (14) 原文の中に該当する内容無し。以下同。
- (15) 「詞」は一句の字数が不定な詩の一種。
- (16) 第二冊に画像番号「chi03\_01080\_0002\_p0001」から「chi03\_01080\_0002\_p0105」まで、画像105枚を収録。
- (17) 画像「1」は表紙、「105」は裏表紙。画像「2」は「3」と同じページで記入を省略。
- (18) 第三冊に画像番号「chi03\_01080\_0003\_p0001」から「chi03\_01080\_0003\_p0042」まで、画像42枚を収録。

- (19) 画像「1」は表紙, 「42」は裏表紙。画像「3」は「4」と同じページで記入を省略。
- (20) 先人の詩文を書いた者と自作の詩文を書いた者の一部が重複しているため, 22人を上回っている。
- (21) 画像番号「chi03\_01080\_0004\_p0005」
- (22) 『早稲田学報』明治40年8月発行第150号 P54-60より, この年に381名の留学生が卒業した。
- (23) 1905年, 早稲田大学は多数の清国人留学生を受け入れ, 彼らに大学レベルの教育をするために, 清国留学生部を開設した。
- (24) 第四冊に画像番号「chi03\_01080\_0004\_p0001」から「chi03\_01080\_0004\_p0133」まで, 画像133枚を収録。
- (25) 画像「1」は表紙, 「133」は裏表紙。
- (26) フランシス・ベーコンは, イギリスの哲学者, 神学者, 法学者。
- (27) 第五冊に画像番号「chi03\_01080\_0005\_p0001」から「chi03\_01080\_0004\_p0113」まで, 画像113枚を収録。
- (28) 画像「1」は表紙, 「113」は裏表紙。画像「2」は「3」と同じページで記入を省略。
- (29) 第二冊の中の楊奇才(画像番号3)は同人だと判断した。そのため, 第五冊の総人数に算入しない。
- (30) 第六冊に画像番号「chi03\_01080\_0006\_p0001」から「chi03\_01080\_0006\_p0016」まで, 画像16枚を収録。
- (31) 画像「1」は表紙, 「16」は裏表紙。画像「5」は「6」と同じページで記入を省略。
- (32) 「貝勒」とは清朝皇族の親王・郡王に次ぐ第3等爵位。
- (33) 『早稲田学報』明治41年1月発行第155号 P98-99
- (34) 鄭鶴声『近世中西史日対照表』中華書局 1981 P784より, 丁未年十一月六日は陽暦の12月10日である。
- (35) 「貝子」とは清朝皇族の第4等爵位。
- (36) 『早稲田学報』明治42年8月発行第174号 P22 記事「早稲田邸の振貝子」
- (37) 鄭鶴声『近世中西史日対照表』中華書局 1981 P788より, 宣統元年五月十七日は陽暦の7月4日である。
- (38) 『早稲田学報』明治42年8月発行第174号 P23 同記事「早稲田邸の振貝子」より
- (39) 『早稲田学報』明治43年5月発行第183号 P14
- (40) 鄭鶴声『近世中西史日対照表』中華書局 1981 P789
- (41) 『早稲田学報』明治41年6月発行第160号 P40
- (42) 第七冊に画像番号「chi03\_01080\_0007\_p0001」から「chi03\_01080\_0007\_p0051」まで, 画像51枚を収録。
- (43) 画像「1」は表紙, 「51」は裏表紙。画像「3」は「4」と同じページで記入を省略。
- (44) 第五冊の中の汪康萊(画像番号32-33)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (45) 第二冊の中の陳錫朋(画像番号97-98)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (46) 第二冊の中の張起元(画像番号89-90)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (47) 第五冊の中の崇貴(画像番号70)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (48) 第五冊の中の徳敏(画像番号85)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (49) 第五冊の中の柯興魁(画像番号83)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (50) 第五冊の中の存忠(画像番号75)とは同人だと判断した。そのため, 第七冊の総人数に算入しない。
- (51) 「脩」=「修」。『歴代職官表』卷三P115より, 「編修」は翰林院に所属する官名のひとつ。科挙の殿試に合格した者のうち, 第1位の状元は翰林院修撰, 第2位の榜眼と第3位の探花は「第一甲」と称される進士及び「第二甲」の進士が, 翰林院編修という書記に無条件で採用される。
- (52) 「表2-3 第三冊 作者たちとその作品」を参照
- (53) 「科挙」は1905年に廃止。
- (54) 「進士」は中国で, 隋・唐代, 科挙の科目の一つ。後にその合格者をもいう。宋以後は郷試・会試(省試)・殿試の三段階すべてに合格したものをいい, 仕官の登竜門であった。
- (55) 『明清進士題名碑錄索引』P2862-2865「光緒二十九年癸卯科(1903)」に載っている名簿より
- (56) 冊別の合計人数に先人の詩文を書いた人数の割

- 合を示し、端数を切り捨てることにする。以下同。
- (57) 冊別の合計人数に自作の詩文を書いた人数の割合を示す。
- (58) 『早稲田大学百年史』第二巻 P160-195
- (59) 『早稲田学報』明治43年8月発行第186号 P2
- (60) 『早稲田大学百年史』第二巻 P173
- (61) 張之洞は清末の政治家。洋務派官僚として重要な役割を果たした。
- (62) 高田早苗 述；薄田定敬 編『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部 1927 P419
- (63) 高田早苗 述；薄田定敬 編『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部 1927 P419
- (64) 『早稲田大学百年史』第二巻 P173
- (65) 『早稲田大学百年史』第二巻 P173
- (66) 青柳篤恒「支那人教育と日米独間の国際的競争」『外交時報』明治41年1月発行第11巻第122号 P70
- (67) 『早稲田大学百年史』第二巻 P193
- (68) 清国留学生部を卒業した留学生たちの職業と経歴は孫倩「早稲田大学における清国人留学生」(『ソシオサイエンス』Vol.19 2013 P112「第3章 帰国後の職業と経歴」)を参照
- (69) 『義馬市志』中州古籍出版社 1991 P313-314
- (70) 「黄禍論」は日清戦争末期の1895年春頃からヨーロッパで唱えられた黄色人種警戒論。
- (71) 注68を参照
- (72) 『早稲田学報』明治40年8月発行第150号 P54-60, 明治43年8月発行第186号 P9
- (73) 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104, 1106  
張玉法『民国初年の政党』岳麓書社 2004 P565

#### 参考文献

- 『外交時報』明治41年1月発行第11巻第122号 外交時報社
- 義馬市地方史志編纂委員会『義馬市志』中州古籍出版社 1991
- 黄本驥『歴代職官表』中華書局 1965
- 朱保炯・謝沛霖『明清進士題名碑錄索引』上海古籍出版社 1980
- 高木理久夫「錢恂年譜（増補改訂版）」『早稲田大学図書館紀要』第60号 2013
- 高田早苗 述；薄田定敬 編『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部 1927
- 張玉法『民国初年の政党』岳麓書社 2004
- 鄭鶴声『近世中西史日対照表』中華書局 1981

中村義『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版 2010  
早稲田学会『早稲田学報』明治30-45年  
早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第二巻 早稲田大学出版部1981

#### 参考史料

『官報 游学生監督処』光緒32年12月第1期 早稲田大学図書館所蔵  
『鴻跡帖』全七冊 早稲田大学図書館所蔵  
「錢恂書簡」早稲田大学図書館所蔵